SEL と哲学対話の親和性について

About between “Social and Emotional Learning” and “Philosophical dialogue”

藤平　昌寿[*1]
Masatoshi FUJIHIRA[*1]
[*1] 自治医科大学
[*1]Jichi Medical University
Email: mail@fujipon.com

あらまし：前稿まで，哲学対話に関する発表を行った．2021 年開催の第 46 回大会プレカンファレンス「SEL（Social and Emotional Learning）の高等教育への適応」において，哲学対話の体験を筆者のファシリテートにより実施した．引き続き，SEL と哲学対話との関連について考えていきたい．
キーワード：対話，哲学，コミュニケーション支援，協調学習，グループ学習

1.　はじめに

筆者はこれまでの本大会において，対話（dialogue）に関するプレカンファレンス・企画セッションに参画してきた．その縁から，2021 年開催の第 46 回大会プレカンファレンス「SEL（Social and Emotional Learning）の高等教育への適応」において，哲学対話の体験を筆者のファシリテートにより実施し，翌年の企画セッションで「SEL 観点からの哲学対話実践報告」として報告した(1).

SEL では，育むべき能力として，以下の 5 つを挙げている（図 1）.

① Self Awareness（自己の理解）
② Self Management（セルフマネジメント）
③ Social Awareness（社会や他者の理解）
④ Relationship Skill（対人関係スキル）
⑤ Responsible Decision Making（責任ある意思決定）

図 1　SEL での育むべき能力（CASEL）

前稿発表時には，対話で出てきた各発言が 5 能力のどの部分に当てはまるのかを模式化した（図 2-1,2-2）.

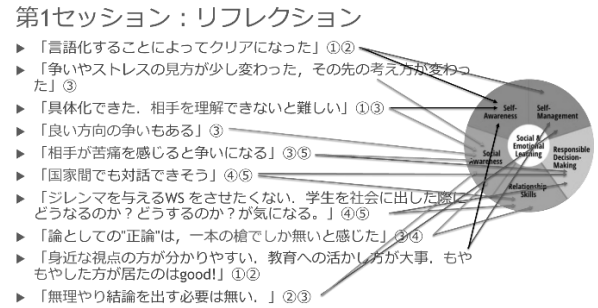

図 2-1　JSiSE46 プレカンファレンス哲学対話発言と SEL5 能力との対応図①

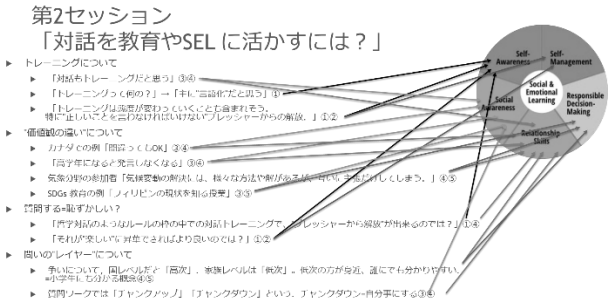

図 2-2　JSiSE46 プレカンファレンス哲学対話発言と SEL5 能力との対応図②

本稿では引き続き，SEL と哲学対話との関連について考えていきたい.

2.　SEL が必要とされる背景

小泉(2020)(2)は，米国での SEL の今後の動向として，教育的公正（educational equity）及び SEL に関わる大人の重要性を挙げている。これらを踏まえ，格差社会や二極化が問題とされつつある日本国内でも，規範・規律・学習・問題解決能力などの土台となる社会性を育むための SEL プログラムによる教育的公正の実現，子供に関わる大人への SEL の必要性などを呼び掛けている.

また，浅部(2022)(3)は，社会や雇用・環境の変化，

社会情動的スキルが個人の Well-being の向上につながる可能性があること，早期の育成が求められるという３点から，社会情動的スキルの育成が求められると主張している．

SEL については主に学校などの教育現場での導入事例が多いが，前述の理由により，地域や大人なども含めたコミュニティ全体での学習活動の必要性が示唆されていると考えられる．

3.　SEL 実施の考え方について

浅部(2022)はまた，社会情動的スキル育成の在り方について，4 つの反論を取り上げ，複数の社会情動的スキルをバランスよく育むこと，多様な価値観の存在を前提にすること，社会情動的スキルは高いほどよいといった一義的な価値付けがなじまないこと，子どもが主体的にどの社会情動的スキルを養いたいかを選択することの重要性を示している。

また小泉(2016)[(4)]は, 学習プログラムのエビデンスの立証について，わが国の教育事情をふまえた妥当性の検討とプロセス評価の必要性を述べた上で，アンカーポイント（構造化の基点）概念を適用して，わが国での実施と持続への取り組みのための手続きや着眼点の整理を行っている．アンカーポイント(AP)は,「人間とその環境との間の相互交流（すなわち相互作用によって双方が変化していくこと）を促進するような人間―環境システム内の要素」と定義されている．

4.　哲学対話との親和性

2 章では，教育的公正の実現などの理由により社会情動的スキルの早期育成が求められる一方，子どもだけでなく大人にも必要であると述べてきた．また，3 章で出てきたアンカーポイントには友人や家族などの人物も環境の一つとして捉えられ，人物との相互交流がアンカーポイント植え込み法の適用範囲となっている．

これらのことから，多様な年代層の人物同士（例えば「小学生と高齢者」など）が互いに一人の人間として対話を実現できる哲学対話は，SEL の活動の一環として，十分に役目を果たすことができると考えられる．

また，前 2 章で出てきた「社会や雇用・環境の変化」「個人の Well-being の向上」「多様な価値観の存在」「一義的な価値付けがなじまない」「主体的にどの社会情動的スキルを養いたいかを選択」などのキーワードにも哲学対話の手法は馴染みやすく, 更に, 小学生にも分かる簡潔なルールや知的安心感の担保などにより，市民に対しても比較的導入のハードルが低く，SEL との親和性は高いと考えられる．

5.　まとめ

以上の観点から，哲学対話の導入や継続が，SEL の推進や社会情動的スキルの向上などのメリットをもたらすと考えている．対話と SEL との関連を示す研究はまだまだ少ないが，今後も継続的に取り組んでいきたい．

本稿執筆にあたり，当該プレカンファレンスのオーガナイザ・参加者の皆さまに感謝申し上げる．

参考文献

(1)　藤平昌寿：SEL 観点からの哲学対話実践報告, 教育システム情報学会第 47 回全国大会発表論文集, pp.59-60,2022

(2)　小泉令三：「社会性と情動の学習」(SEL)と教育的公正　ーアメリカでの CASEL SEL-EXCHANGE の資料をもとにー，福岡教育大学大学院教職実践専攻年報第 10 号，pp.45-49, 2020

(3)　浅部航太：社会情動的スキルの育成が求められる背景と育成の在り方の検討, 北海道教育大学大学院高度教職実践専攻研究紀要 ： 教職大学院研究紀要第 12 号, 2022

(4)　小泉令三：社会性と情動の学習（SEL）の実施と持続に向けて―アンカーポイント植え込み法の適用―, The Annual Report of Educational Psychology in Japan, Vol.55, pp203-207, 2016